



寄棟造りのかやぶき屋根では  
東北でも最大級

1/暮らすだけでなく養蚕業を行う作業場を兼ねた住宅は、東側の妻※2を彩光のために切り落とした半切妻屋根となっている。柱と貫※3の格子の黒、しつこいの白壁との対比が美しくヨーロッパの古民家を思わせる佇まい 2/囲炉裏の上部。天井の奥に力強い小屋組の一部が見える。主に米を生産する豪農だったが、昭和10年頃まで養蚕も営んだ 3/冬には雪に包まれ真っ白になる佐藤家



※写真提供・撮影：佐藤二三男 様



古い家が  
物語る  
まちの歴史

どっしりしたかやぶき屋根を見ると安らぎを感じるのにはなせでしょうか。遠い昔への郷愁がそよそよと流れてくる。今を生きる私たちが、懐かしい時間に誘ってくれるかやぶき屋根は、明治・大正、さらには江戸時代からの福島の歴史を物語る大切な建物です。一方、生活様式の変化や維持管理が大変なこともあり急速にかやぶき屋根が姿を消してきました。そうした中「茅の葺き方教室」(市教育委員会主催)に参加した有志が1軒でも多くのかやぶき屋根を残していく一助になると、平成29年2月「福島市かやぶき文化伝承会」を立ち上げました。今号では、市内にある江戸時代から平成までのかやぶき屋根を訪ねて、心に響くその魅力を紹介します。



十代当主が明治6年に建築した。梁行6間、桁行12間半、一部2階建て。のべ床面積約330㎡。屋根は、東北地方でよくみられる兜屋根。中央に煙出し用の越屋根(屋根の上に載せた小さな屋根)を配している。平成25年、国登録有形文化財に登録された。中に入ると広い土間があり、さらに進むと囲炉裏の煙でいぶされ黒光りしたケヤキの梁や板戸が出迎えてくれる。3つの和室の襖を開けると38畳にもなる大空間を使って、能や朗読会などを開催したことも

## 国登録有形文化財 佐藤家住宅

築140年  
独特の重みと  
おおらかさが魅力

福島市内で息をのむほど美しいかやぶき屋根と言え、佐藤家住宅です。十代当主がご子息の誕生を記念して建てたという住まいは、当時の養蚕農家の典型として知られる木造寄棟造りですが、まず圧倒されるのがその大きさです。一面芝生の前庭との相性も抜群で、独特の重厚感とおおらかさを保ちながら140年を経た今もどっしりと建っています。

十三代当主・佐藤利男さんご夫妻は、昭和48年からこの家で暮らし始めました。何層にも葺かれたカヤが雨水を軒下まで伝えるので、室内に雨水は入りません。音も吸収するので静かです。風通しも良く夏は涼しいのですが、冬が寒いことから現在は離れに住み、こちらは来客用として使っています。かやぶき屋根は、維持管理に大変な費用がかかります

が、佐藤さんはこれまでに3度の大きな補修を行ってきました。囲炉裏から出る煙がカヤを長持ちさせる効果があるため、冬になるとほぼ毎日火をたいているそうです。他にも時々開催される見学会にも協力しています。年配の方々がかやぶき屋根で昔を思い出し、元気をもらって帰る様子に、将来の活用が見えたとも話してくださいました。「かやぶき屋根には人を元気にする力があるんですよね。ここを近隣の年配者が集まれる憩いの場所にしようと準備を進めているところです」と佐藤さん。何と素敵なプランでしょう。これからの展開が楽しみです。



福島市泉字清水内3 公開(要事前申し込み)  
福島市文化課 ☎024-525-3785